

風を起こす <第15回>

出会いを力に、
一歩ずつ、着実に

鶴ヶ島市総務部人事課長

中野 波津巳さん

今年4月、鶴ヶ島市で初となる管理部門の女性課長が誕生した。それぞれの異動先で、目標を定め、時に悩み、支えられながら、一歩ずつ歩んできた中野波津巳さん。一見無関係に思える仕事でも、すべてが現在につながってきているのだという。どこへ行くことも、目の前の仕事と真摯に向き合い、着実にこなすことが、自らの強みになった。

「ウーマノミクス」という言葉がある。ウーマンWomanとエコノミクスEconomicsから成る造語で、女性の力が経済にインパクトを与えることを意味する。1986年に男女雇用機会均等法が施行されて既に四半世紀が経つが、女性にとって就労環境はさほど改善されていない。事実、結婚や出産を機に仕事を辞める女性の割合は他の先進国に比べて高い。埋もれた資源となっている日本の女性たちの能力をいかに活用していく

かが、今後の日本経済を考えていく上での一つのカギとなるのではないだろうか。

目指すべき道を教えてくれた

「ひまわり会」の出会い

埼玉県鶴ヶ島市。池袋から急行電車で40分の便利さとあって、駅前には公団住宅をはじめマンションが建ち並ぶ。桑畑や水田が広がっていた農村地帯は、高度経済成長を機にベッドタウン化が進められ、



[なかのはつみ]

埼玉県桶川市出身。早稲田大学教育学部を卒業後、鶴ヶ島町（平成3年に市制施行）に入庁。総務課、経済課、自治振興課、高齢障害福祉課、女性センター館長等を経て、平成23年4月より現職。平成15年、城西国際大学大学院人文科学研究科女性学専攻修士課程に社会人入学して修了。ストレス解消法は、甘い物とコーヒーをかたわらに好きな本を読むこと



市の産業まつりにて、ひまわり会のメンバー、長女とともに

1980年代、人口は爆発的に増加。農地が次々に宅地開発されるのともない、専業農家は著しく減少していた。

入庁4年目の中野波津巳さんが経済課農政係に配属されたのは、鶴ヶ島の農業がまさに転換期を迎えていた頃だった。都市近郊型農業として専業農家が存続していくためにどうしたらいいか、新たな経営的発想が求められていた。

一方、全国的には農家の女性たちの生活を向上させようという動きがあった。農家に嫁いだ妻は働き手として農業生産に従事しているにもかかわらず、発言権がなく、地位が低い。サラリーマンであれば妻が握ることが多い財布の紐も、農家ではすべて親が握っているのが当たり前。

農家の女性たちが置かれた状況を改善するための取り組みは、埼玉県でも積極的に行われていた。

「県の生活改良普及員の熱心な働きかけにより、鶴ヶ島では専業農家の女性たちが自分たちの会をつくろうと動き始めていました。そのサポートをやってみたらということ、職場の先輩が私を担当してくれるのです」

中野さんにとっては願ってもないチャンスだった。総務課から経済課農政係への異動も希望が叶ったこと。農政係を希望したのは食の安全に興味があったからだではない。何よりも市民生活に身近なところに関わりたくて地方公務員という職業を選んだ以上、現場に出たかったからだ。

「ひまわり会」と名づけられた女性たちの会をサポートするため、町が事務局となった。中野さんは会則をつくったり研修会の案内を出すといった事務的な面だけでなく、さまざまなアドバイスも行った。一団体の事務局を行政が担当することには否定的な意見もあっただろう。だが、自由に外出しにくい農家の嫁にとつて「役所からの通知」は大きな後押しになった。

ひまわり会の発足から1年後には、生産者と消費者の交流イベント「いきいき野菜まつり」が開催された。農業者自らが新鮮な野菜を販売するイベントは、消費者グループによるかぼちゃケーキ、人参



ひまわり会の女性が広報紙の表紙を飾ったことも

ゼリーなど新鮮野菜のスイーツも出品され、予想を上回る盛況ぶりとなった。

「男性の生産者の場合、見た目がよく規格のそろった市場で評価される野菜の生産を重視する人が多かったのに対し、ひまわり会の女性たちは消費者が安心して安全な野菜を求めることに、自ら家族の食事づくりにも携わる立場から共感できたのです」

消費者との交流イベントで手応えを感じたひまわり会は、消費者が直接生産者から農産物を購入できるよう直売マップを作成した。今でこそよく見かけるようになった直売マップだが、当時は斬新な取り組みとして消費者の関心を集めた。都市化の中での農業に可能性を見出したい、一生産者としての自覚と自信が芽生えた



ひまわり会が農林水産大臣賞の候補となった際、審査のために訪問された樋口恵子さんを囲んで

女性たちの思いは、消費者と生産者をつなぐ架け橋になった。

「畑と家の往復だけの毎日で他の農家の顔さえ知らない。そんな女性たちが、ひまわり会を通して自分たちの中に眠っていた力に気づいたとき、それは爆発的なエネルギーになったのです。農業に関する学習や情報交換だけでなく、地域でのボランティア、他市町村の農業者との交流会など、地域や社会に目を向け、自分たちの可能性を広げていきました」

会の創設から携わっていた中野さんは、生き生きと輝きを増していく専業農家の女性たちを間近で見ながら、大いに刺激を受けた。それは、自らにとつて一つの転機ともなった

「異動するまでは、女性のキャリアモデルが見つからず、ここで仕事を続けていったらどうなるんだろうという漠然とした不安がありました。でも、農政係としてひまわり会の女性たちをはじめ市民と直接する中で、仕事自体がおもしろくなつてしまつて。男性も女性も関係なく、自分がやりたいことをやればいいと吹っ切れたのかもしれない」

農政係での3年間は、プライベートにおいて結婚、出産という大きなライフイベントを経験した時期でもある。育児休業法が制定される以前の出産は、産前産後の休暇だけで育児休業がない。つわりは重くなかつたものの、さすがに産休に入る直前は通勤のための運転ができず、ちょうど夏休み中だった県立高校教師の夫に送り迎えをしてもらつて乗り切つた。産後8週間を経て職場復帰したとは言つても、まだ授乳期間中。職場のトイレで搾乳しなければならぬつらさは察するに余りある。それでも中野さんは実家の母親の力を借りながら仕事に邁進した。

転入者にも地域に愛着を持つてほしい

出産後ほどなくして異動したのは自治体振興課広報係だった。「自分としてはまた農政を続けたかったんですけどね」後ろ髪を引かれる思いだったが、すぐに新しい仕事に夢中になった。担当したのは月2

回発行される広報紙や市勢要覧の作成など。広報紙の編集にあつては、原稿執筆からレイアウト、写真撮影までこなさなければならぬ。一眼レフカメラに慣れるため、幼い我が子を練習台にシャッターを切つた。

「取材して記事を書くのはとても楽しかったのですが、読み手の方がどう受け取るか、本当に伝えたいことが伝わるのかを常に意識していました。思い入れが強いほど、独りよがりになつてしまいがちですから」

折しも、鶴ヶ島町は流入人口の増加によつて市へ昇格したばかり。中野さんには、新しく移り住んできた方に地元への愛着をもつてほしいという想いもあった。その一環として、鶴ヶ島の伝統行事である脚折雨乞すねおりあまごいに興味をもつてもらおうべく写真で特集を組んだことも。転入者にとつて自治体の広報紙は新天地での重要な情報源。自治体にとつても地域を知つてもらうための有効なツールとなる。中野さんは、地域を支える一つの力となつていたひまわり会の活動も取り上げ、継続的に紹介していた。

「それまで、広報紙などで農家が脚光を浴びることはほとんどありませんでした。でも、農業は命を支える大切な産業なんですよね。食の生産を担う農業に光をあてるとともに、鶴ヶ島では消費者と近いからこそこんな農業やっていますというこ

とを、新しく住民となった人も含めて皆に知ってほしかった」

余裕をもって対応するための知識

4年間の広報担当の後、高齢障害福祉課を経て異動したのは政策推進課。周囲はほとんどが男性職員という中で、文化行政や市民活動推進の業務に取り組みながら、男女共同参画も兼務することに。それはちょうど国が男女共同参画社会基本法を制定した年だったのだが、この法律に中野さんは少なからず衝撃を受けた。男女共同参画の社会を目指すなんていうことを国が考えているんだ。

たった一人の実務担当者として、市民とともに男女共同参画社会の実現に向けて取り組まなければならない。だが、男女共同参画について理解のある市民はごく一部という状況。職場においてもなかなか理解を得られない。男女共同参画にアレルギーをもっている人にも正しく理解してほしい。そのためには自分自身もつと知識を身につけなければ――思いを募らせていたところ、たまたま講演に来ていた城西国際大学の教授から貴重な情報を得た。「日本で初めて女性学専攻を開設した大学院で、社会人向けのプログラムを新設するのですが、中野さんも受けてみませんか？」願書締切りまで1週間という直前での誘いに一晩悩んだ末、チャレ

ンジすることを決めた。ここでやらなければきつと後悔する。

十数年ぶりの英語と論文試験も無事クリアし、晴れて社会人学生になったとはいえ、仕事と家事、子育てをしながらの大学院生活は時間との闘いだった。

「開講は土曜日で、1コマ90分の授業を3〜4コマ受けていました。毎週必ず出される課題をこなすため、平日は早朝4時から家族が起きてくるまでの2時間、レポートを書いたりしていました」

当初半年間は千葉県東金にある校舎まで片道2時間半の通学。生徒一人だから休むわけにいかない。その後、埼玉県内での開講となり、共に学ぶ仲間も増えて一緒に卒業した。視野を広げてくれた彼女たちとの出会いも財産になった。

目標を定め、一歩ずつ前へ

大学院生活で得た知識と経験は、異動先の秘書政策課で女性センター館長に就任したことで生かされた。

「男女共同参画プランは既に策定されていましたが、男女共同参画条例はまだでした。ですが、条例は男女共同参画のまちづくりを進めるための大きなバックボーンになるもの。ぜひつくりたいと思っていました」

条例制定を望む声は市民からも上がっていた。とは言っても、男女共同参画に

関心がない、もしくは反対など意見の異なる人も含めて皆に理解を得なければならぬ。その上で議会で否決されれば元も子もない。

市民からあまりありがたがられない仕事をやる中で心が折れそうになったとき、上司である男性職員の言葉に救われた。「これからの日本は従来の、男性が仕事、女性が家事・育児という役割分担では立ち行かなくなるだろう。働く意欲がある人に働いてもらうことが必要じゃないか。国が男女共同参画推進を21世紀の重要課題だと言っている意味がとてよくわかる」。上司は男女共同参画について自分なりに勉強し、理解し、背中を押して



中野さんが館長を務めていた女性センターでは、約90団体によるさまざまな活動が行われている



くれた。

試行錯誤の末に提出された「鶴ヶ島市男女共同参画推進条例」は議会で可決され、平成22年3月24日制定された。

「ちよつとずつ皆さんに情報を知ってもらいながら進めていったのが、よかったのかもしれない」

中野さんが発足時より見守り続けてきたひまわり会の女性たちも、一つずつ実績を積み重ねていくことで、家族の意識を変えてきた。相手とぶつかるのではなく、少しずつ前に出て、周囲を応援団にしてみようという彼女たちの手法に、学んだところも大きい。ひまわり会はそうした取り組みが認められて農林水産大臣賞を受けている。

100キロをゆつくり走るよくな気持ちで

中野さんは今春の人事異動で「人事課

【中野波津巳さんのキャリアパス】

- 総務課 庶務係に3カ月勤務した後、町長秘書に
- 経済課 農政係に配属。農業振興の一環として、専業農家の女性たちの会「ひまわり会」の発足に携わる
——この間に結婚と出産——
- 自治振興課 広報紙や市勢要覧等の制作担当として、企画から写真撮影、執筆、レイアウトまでをこなす
- 高齢障害福祉課 障害者福祉の担当になり、職務上必要なケースワーカーの資格を取得。障害者を介護するご家族のつらさを肌で感じながら、障害者施設など社会資源が少なく、力になれていないことに無力感を覚えた
——この間、昇任試験に合格。試験に合格した女性職員の会「まちづくり研究会」に入会——
- 政策推進課 文化行政や市民活動推進などの業務をこなしながら男女共同参画担当を兼務。講演会やシンポジウムを企画したほか、市民と共に男女共同参画の情報紙も発行
——この間、城西国際大学大学院人文科学研究科女性学専攻修士課程に社会人入学し、1年半で修了——
- 税務課 固定資産税の担当として、土地家屋に対する課税業務を担う
- 秘書政策課 女性センター館長を任命され、鶴ヶ島市男女共同参画推進条例の制定に携わる
- 総務部人事課 課長に就任

課長」の内示を受け、驚きを隠せなかった。同時に責任の重さと未知の領域に踏み入ることにプレッシャーを感じた。「全力疾走せずに、100キロをゆつくり完走するような気持ちでやりなさい」励ましてくれる周囲の言葉に、覚悟が決まった。女性、男性というよりも、今まで自分が教えていただいたことをやっていくしかない。

20代、30代は自分がやりたいことを上司の理解を得ながら突っ走ってきた。昇任試験を経て管理職に就いてからは、組織の中で自分に求められる役割の変化に気づき、チームワークを大事にしてきた。「チームとして皆が同じ目標をもち、課題を共有しながら、少しでも良い方向にもっていくことが必要なのかな。一人ではできないことは、わずかしかありませんからね」

これまでの流れの中で、今度は役所内部での男女共同参画も進めていきたいと

意気込む。そのための課題も見えている。一つは昇任試験の受験率を上げること。昇進を望まない若い世代や女性職員たちの意欲を、どうすれば引き出ししていくのか。腕の見せ所だ。

「背景の一つには、受験時期を迎える30代は幼い子どもを抱えた女性職員が多いという現状があります。自分自身を振り返ってみても、子どもが小さい頃、昇任試験を何度かスルーしてしまいました。でも、上司が強く勧めてくださいましたお陰で、道が拓けていったのです」

「男女の別なく、一人一人が自立して生きていける社会になったらいいなと思います。そのためには制度も大事ですが、人々の意識も変えていく必要があるのかもしれないね」

春の日だまりのような笑顔の奥には、確固たる信念が秘められている。

(協会職員／篠田良子)